

本研究は、中世の神話言説の形成と展開を明らかにすることで、〈中世日本紀〉の解明を目指すものである。1972年に発表された「中世日本紀の輪郭—太平記における卜部兼員説をめぐって」（『文学』40・10、1972年）において、伊藤正義氏は、中世の注釈書などに、「日本紀に曰く」として記録される内容が、実は『日本書紀』に依拠するものではなく、日本紀注釈書などで語られる言説であることが多い点に注目した。「日本紀」とは、神祇および日本の起源に関わる言説を引用する際の記号として用いられていた実態を明らかにし、そのような本文を逸脱していく『日本書紀』享受のありようを、〈中世日本紀〉と呼び、中世的言説のひとつの型として提唱した。〈中世日本紀〉という視座は、今まで注意が払われなかった中世の注釈書・神道書・寺社縁起・本地物語など、中世の膨大なテキスト群に含まれる神話言説を研究の視野に入れるものであり、日本神話研究の幅は一層広がった。1980年代に入ると、阿部泰郎氏、伊藤聡氏、小川豊生氏、小峯和明氏、斎藤英喜氏等によって、〈中世日本紀〉に関する本格的な研究がはじまる。なかでも、山本ひろ子氏は、『古事記』と『日本書紀』（以下「記紀」と略す）を出典とする言説や注釈世界と理解されていた〈中世日本紀〉に加え、中世に新たに生まれてくる「寺社縁起」や「本地物」も包括する概念である〈中世神話〉を提示し、研究の幅はさらに広がりつつある。このように、中世の神話言説の重要性が再認識され、日本文学研究者を中心に、歴史学や思想史にも影響を及ぼしながら、研究が進められている。しかし、膨大な関連資料とバリエーションを有する中世の神話群は、未解明の領域が数多く残されており、今後もさらなる研究が求められている。

本研究は、以上のような、中世の神話言説における研究動向を引き継ぐものである。先行研究を踏まえたうえで、中世の神話言説の形成と展開を追いながら、その究明を試みた。検討の対象としたのは、中世の神話言説のなかでも「記紀」に取材する伝承である。「記紀」に取材する伝承をとりあげた理由は、古代との比較を通して中世の特徴がより浮き彫りになってくると思われるからであり、記紀神話の中世的変容、つまり、〈中世日本紀〉の形成と展開を究明することは、記紀神話の享受を考える上でも貴重な成果になると期待されるからである。

本論文は、四部より構成される。第一部から第三部までは、中世にみえる展開の様相に注目し、「交代する神話」、「よみがえる神話」、「生まれ変わる神話」に大分して考察をおこなっていく。

まず、第一部「交代する神話」では、「予言」をめぐる伝承を中心に、時代の変化にしたがって交代していく神話の展開から、神話の持つ限定性について考えた。第一章で

は、さまざまな占トの中から「フトマニ」と「亀ト」をとりあげる。フトマニは鹿の骨を焼いてうらなう占トであり、主に神話時代の出来事として登場し、神がおこなう占トとみなされた。一方、亀トは、鹿の骨の代わりに、亀の甲羅を用いる占ト方法で、骨トより遅れて大陸から伝来したが、骨トを抑えて成長をとげた新しい占ト方法である。中世になると、フトマニと亀トは、おのおのの伝承がお互い影響し合いながら展開していく。第一章では、このように交差する神話に注目し、文献資料だけでなく考古学資料も検討対象に入れて、占ト方法の変化が新たな神話を生み出す過程を明らかにした。

第一部の第二章では、「ワザウタ（童謡・謡歌）」に焦点を当て、限定された時期とテキストに現れる神話言説について考えてみた。童謡は、天変地異と並ぶ予兆とみなされた古代歌謡の一種であり、日本だけでなく、漢字文化圏に共通に存在した。しかし、近代に入るまで、童謡が存続していた中国と韓国に比べ、日本のワザウタは、皇極朝（七世紀前半）からの百年あまりの限定された期間に集中的に現れており、天安二年（八五八）を最後に記録から姿を消してしまった。ワザウタは時間的限定性だけでなく、『日本書紀』、『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本三代実録』という史書にのみ記録されている。このように限定された時期とテキストに出現するワザウタの性格に注目しながら、漢字文化圏にみえる童謡関連資料を手がかりに、日本のワザウタが担っていた機能と、その消滅の意味について考察した。

第二部では、「よみがえる神話」として「ヒルコ伝承」をとりあげる。「ヒルコ」は、記紀神話の「国生みの段」と「三貴子誕生の段」に登場する神である。イザナキとイザナミの二神の御子として生まれるが、三歳になっても足が立たなかったため、海に放棄される。流された後は再び語られることなく、そのまま記録から姿を消してしまうが、中世になると、ヒルコは「エビス」になって帰ってくる。流されたヒルコは、時代の変化とともに、その位相の変化を遂げ、厚い信仰を受ける神になって華々しい帰還をとげる。古代から中世にかけて、ヒルコ伝承の展開を追いながら、新たなヒルコ伝承（ヒルコ・エビス同体説）が登場する経緯を究明した結果、ヒルコ・エビス同体説を「西宮神社」の縁起譚と位置づけた。伝承の形成と展開に影響を及ぼしたと考えられる人々の足跡をたどりつつ、西宮神社の祭神であるエビス（夷三郎殿）をはじめ、西宮周辺に伝わる神話伝承を検討することで、ヒルコがエビスとして祀られるようになった理由についても考察をおこなった。

第三部は、「記紀」にみえるヒコホホデミノミコトの龍宮訪問譚、いわゆる「海幸山幸伝承」を取り上げた。海幸山幸伝承は、神武天皇の誕生にまつわる神話であり、神話時代の結末と皇統の始発に位置していることでも、その重要性がじゅうぶんにかがえる。海幸山幸伝承は日本紀注釈書類をはじめとする諸文献に異伝が散見するが、なかでも、神代の物語では唯一に独立して絵巻化されたことは注目すべき点といえる。多様なジャンルに亘って、豊かなバリエーションの異伝を持つ海幸山幸伝承は、中世における神話伝承の

展開を考察するための恰好の素材といえる。まず、先行研究を踏まえながら、海幸山幸伝承の諸相を考察した。そして、中世のテキストのなかでも、院政期に制作された『彦火々出見尊絵巻』（ただし、十七世紀の模写本のみ現存）と室町時代の成立とされる絵巻『かみよ物語（別称「玉井物語」）』、つまり、絵巻として制作された海幸山幸伝承に焦点をあて、海幸山幸神話の中世の変容を図像を検討対象に入れて考察した。さらに、先行研究の少ない絵巻『かみよ物語』の解明を試みた。絵巻『かみよ物語』は、海幸山幸伝承を物語草子化し、絵巻に仕立てたもので、十二世紀に制作された『彦火々出見尊絵巻』とは別系統の絵巻であり、詞書と絵画において、中世の言説を取り込んだ独自性が認められる。絵巻として制作されたこと、また、改変の度合いが著しく、その独自の内容からも注目すべきテキストといえる。しかし、海幸山幸伝承の展開を考える上で貴重なテキストであるにもかかわらず、絵巻『かみよ物語』には今まであまり注意が払われてこなかった。基礎的な伝本調査に基づき、系統の分類と内容検討を行ない、絵巻『かみよ物語』を読み解き、〈中世日本紀〉としての位置づけを試みた。

第四部では、東アジアに目を転じ、東アジアの〈中世日本紀〉たる動きを考察することで、アジアにおける〈中世日本紀〉研究の可能性について考えた。中世（高麗時代）以後、再生成しつづける韓国の「檀君神話」をとりあげて、その展開を明らかにし、蒙古襲来を契機に再認識され、新たな神話へと生まれ変わったことを確認した。時代に合わせて変貌をとげていく展開は、まさに日本の〈中世日本紀〉を思わせるものであり、同じく蒙古侵略で再生成された中世の「神功皇后神話」にも比肩できる。このように、〈中世日本紀〉という視座は日本だけに限らず、既知の神話を読み直し、再評価できる概念であり、比較研究においてもさらなる可能性を提示してくれている。

〈中世日本紀〉は中世の価値観や思想が投影されており、中世を知る格好の資料となる。その生成と展開をみてみると、フトマニと亀卜の伝承がお互い影響し合いながら展開されて、亀卜の由来を説く新たな神話を生み出したように、〈中世日本紀〉には他伝承との影響関係が顕著に現れる。中世のヒルコ伝承に、龍王からの引出物のような「山幸海幸伝承」に類似する記述がみえるように、他伝承を取り込むことで多岐に展開する点が特徴として指摘できよう。謡曲『玉井』と絵巻『かみよ物語』のように、ジャンルを超える影響関係も確認できる。このように、他伝承や他ジャンルとの交差を繰り返しながら展開する〈中世日本紀〉は、多角的な立場からのアプローチが可能なジャンルであり、今後は、他作品や他ジャンルを照らし合わせながら、東アジアも視野に入れて検討していく研究が求められると思われる。